

民俗の地域差はなにを語るのか

——変動する地域社会とふるさと意識の形成——

湯川洋司

はじめに——課題に代えて——

- 一 変動する地域社会と民俗学のあり方
- 二 ふるさと観の現在とふるさと意識の形成
- 三 ふるさと意識と広域志向性
- 四 選り取るふるさと

論文要旨

民俗の地域差について、民俗学は大きく二つの立場から理解しようとしてきた。一つはこれを歴史的時間差を示すとみて民俗の変遷を明らかにしようとする立場であり、もう一つは地域性の現われとみて日本における民俗の多様性と地域的独自性を読み取ろうとする立場である。本稿は、これら二つの立場に加えて、個別の地域社会の形成と関連させて民俗の地域差の意味を把握する立場を主張しようとするものである。

現在、日本の地域社会は大きな変動に襲われ、流動化し、なかには解体、崩壊の危機にさらされている所もある。それに伴い地域再生を掲げるさまざまな試みが各地で展開してもいる。その試みは、いわばふるさと意識の形成に力点が置かれているといつてよいが、そこに民俗の地域差の認識がかかわってくる。すなわち、ふるさと意識なるものは、たとえばおらが村といった郷土意識として自覚されるものであり、他方においては異郷意識の形成を促すものである

から、両様の意識が拮抗するなかで生成される個別の地域社会の独自性を、民俗の地域差として認識する方向もありうるのではないかと思われる。ただし、その場合、民俗を従来のようにムラなどのある集団の規範性の中に求めるだけでなく、個人のもつ価値観が相互にぶつかり合い選択を繰り返しながら民俗が生成される過程に目を注ぐ必要も考慮されねばならないだろう。

一方、異郷意識を抱きながらも共通に認識される郷土意識の形成プロセスに着目すれば、郷土意識を自覚する地理的スケールは個別の地域社会から国土全体に至るまで連続的に展開することになるはずであり、その限りにおいては日本人らしさも郷土意識の一表現と見ることが可能になる。したがって、民俗の地域差がもつ意味をより深く検討することは、種々のスケールの地域問題を抱える現代日本社会を分析考察する方向へ民俗学を導いていくことになるだろう。